
柚色物語

雄花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

柚色物語

【Nコード】

N8127D

【作者名】

雄花

【あらすじ】

ピンボーで女顔な少年・柚木柚はおバカ母のせいで超・お金持ち学校に入学することに！？変人たちに振り回され、柚の学校生活ははちゃめちゃに！どたばたラブコメです！

第01話「超・お金持ち高校に入学!？」

僕の名前は、^{ユズキユズ}柚木柚女顔で、趣味はお花の水遣り。なんとも、女の子っぽい

男の子です。世界でいちばん、怖いものはあ!・・・女の子かな? やっぱり。

僕は、幼い頃から女性に囲まれて育ってきた。

父は、母が結婚してまもなく逃走。妹・椛と、姉の梓ねえちゃんにいつも、いじられてきた。

そして、一番の問題は・・・!母ですな。

かあさんの名前は、^{ユズキケイ}柚木桂と言って、勝手に幸運を呼ぶ招き猫だとか

いつの間にか、100万の借金を背負ってきたとか・・・

その、借金を僕が汗水たらして!! (椛と、梓ねえはやらない) 頑張って返済したらあ・・・

そしてら、また変なもん買ってきてさあ・・・

おかげで、うちはいっつもビンボーさっ!

で・・・僕のこれから巻き起こる波乱な人生は、おバカ母のせいで、

始まるのだ・・・

「ゆうず君」

なんですか？ マーク、語尾につけてなんですか？

ただ、うざいだけなんですけど？

そして、また僕に働かせようってわけなのか？

ていうか、消えてくれないかな？

「なに・・・？」

ため息交じりで、僕は答えると、逆に母はニコニコしながら言った。

「柚君、来年、高校受験しよっ？」

「ああ、そだね・・・」

「でね？」

でねでね？と、母は表情を変えずに、僕に近寄る。

は？気持ち悪いんですけど？

そんなに、顔近づけないでください。きもいので。

「柚君は、オウコク皇国学院に、通うことになりましたあー！！！」

「はああああああ！！！！！」

「あら？どうしたの？」

「どうしたのじゃないよ！お金は！？そんな、お金あるのお！！？」

「特待生で入れば？学費めんどじよだし」

「マークいらないよお！！！！ていうか、無理ですから！」

「大丈夫 柚君なら、出来るよ」

「30過ぎるのに、女子高校生みたいなノリはやめろおおお！！！！」

「大丈夫 住むところは、宿直室に泊まってもらえるよう、いつたから」

「それって、僕が入学するみたいな言い方だなああああ！！！！」

「大丈夫 絶対、合格するから」

「消えてくれ。マジで。」

ひゅーっ 木枯らしの効果音がに合う表情を僕はしたと思う。

だつて無理だと思つていたから。

このままじゃ、高校もは入れないと思つていたから。

逆に、中学に進入する椋や大学に行く、梓ねえを優先すると

ココロに決めていたから。

半分、嬉しい気持ちもあった。

けど、けど、けどおおお!!!!

「絶対、受かんないよ!!!!」

蒼い空に、僕は思いつきり叫んだ。

そして・・・受験当日。

僕は、わざわざもつたいない、電車賃を使い、

わざわざ!!!(そこ強調)新潟から東京に来たんだよ!?

そこが、落とし穴・・・

周りは、人でたくさんだった。皆、お金持ちっぽい人ばかりで

たま～～に、首にダイヤモンドのネックレスをにかけている人もいて

思わず、涎が垂れてしまった。

まあ、こんなかんだで？一応、試験を受けてみた。

その前に、可愛い女の子に出会った。

人ごみの中で、僕は一番に見つけた。

長い、綺麗なピンクの髪を、一つに結んでいて

ぼーと、空を見つめていた。

僕が、ぼーと見ていると、

「なに？じろじろ見ないでよ。」

「はあ・・・」

「はあ・・・じゃないわよ！私を見たのだから、罰金10万よ！」

「無理です！僕には、払えません！」

「冗談にきまっているじゃない。この・・・女顔！」

この、女顔！と言うところが、僕の精神が腐り落ちた。

ヤク、99パーセントフショウ。

キノウテイシッピー

てー！ふざけている場合じゃあー！

「ん・・・試験、お互い、頑張りましょうね。」

僕が、一応言ってみたらその少女は・・・

「女顔に言われる筋合いはないわよっ！さっさと、不合格になったら？」

「はっ！」

これで、僕の精神はズタばらになった。

もう、泣きそう・・・

「じゃね。」

そして、辛口少女は、去っていった。

なに？僕、なんかした？？なんか、悪いことやりました？神様！

それなら、あのおバカ母を滅してくださいよ！

あれ、あれですか？僕が間違えて食べてしまった

スーパーのショートケーキ約、150円の高級ショートケーキですか？

すみません！すみません！あれは、間違えてですねっ！！

なにやってるんだ・・・僕はあ・・・

「試験開始!!」

あれ?いつの間にか、始まって!

僕の、前には試験用紙が配られた。

で、書き始めてみると

あれ?簡単じゃね?

あれ?これ、分かるのですけど・・・

あれ?こんなに、簡単なんすか?

ごめんごめん、今頑張る受験生たちよ、すまん。

試験しゅーりょ・・・

以外と、簡単だったな。いけるかも?これ。

いつ!いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやあ!!

すごい不安だ。ものすごく。

さつてと、帰るか!

そして・・・結果の紙が届いた。

結果は？

「ごうかくう???さらに、特待生!??」

「やったじゃない!柚君っ!」

最初に喜んでいたので、僕は後に後悔するの

一ミリも思っていなかった・・・

第02話「宿直室での変人第一号」

僕、柚木柚は女顔であり趣味がお花の水遣り女の子が苦手。

昔っから、家族の世話係を担当していたので料理などが得意。

そして、ビンボー少年でありながら・・・

と・く・た・い・せ・いで、あの超お金持ち学校、皇国学院に入学することになった。

明日から、僕の新生活が始まる前に明日からの僕の寝場所となる宿直室に荷物を置くことになっていた。

ポストンバック（つかいすて）には、洋服と下着と小銭しか持ってきていない。

今頃の学生とかは、最新の携帯電話とか持っているとおもっけど生憎、僕にそんなものは必要ない！

まあ・・・一度・・・結構ほしいな、と思ったりはするけどさ・・・

でもお！けえたい電話なんかなくなつたて生きていけるんだよあ！ホームレスのおじいさんが叫んでいた！！

叫ぶ必要はないと思うけど！！

てことで、家からおよそ3時間、僕は今皇国学院の前にいる。

王国学院とは、全国で一番お金持ちが通っていて

その面積は、約3000ha^{ヘクタール}あるし、しかも超・頭がいい名門校で
偏差値は65以上という・・・化け物みたいなところ。

それに、全ての設備において全てがトップクラス！

あのかの有名な、三菱企業^{ミヅビシ}の娘さんだっという事だし
あの政治家の風祭大臣^{カザマツリ}の娘さんだっというところ！

まさに、全てにおいてトップクラスだね！

僕の胸は弾むが、少し残念なところがある。

だって、^{モミジ}栞と^{アスサ}梓ねえに悪いじゃん？

それに、僕がいなかったら柚木家おしまいじゃん？

あと、^{シアサッテ}明々後日スーパーの特価売りがあるじゃん？あ、知らないか・
・

ああっ！！なんで明日入学なんだぁー！！！！楽しみにしていた
のにいいいい！！！！

「柚木柚君？」

「はへ？」

後ろから、女の人の声がした。

僕が振り向くと、20代後半ぐらいの、女性が立っていた。

こい、黒い髪をしていて髪を後ろに束ねていた。

すらりとした体からは、まさに大人の女性というのが見事に感じられた。

いやあ、うちの母とはちがうねえ！

「はい……柚木柚ですけど……」

僕がそう言うと、女の方はニコリと微笑んだ。

「始めまして、アカツキリエ暁理恵と申します。一応、あなたの担任よ。」

「僕の担任の先生ですか……」

「こっち来て」

暁先生は、僕の腕を引っ張ると校内に入った。大きい銅像、壁掛け・
・僕の目には高級なものが入ってくる。ほ、ほし・

そして、ドアの前で先生は止まる。

そこには、『宿直室』と大きく書いてあった。

そうかあ……ここが宿直室かあ……

ほあ……と僕が見とれていたら先生がドアを開ける。

まさに！まさに！部屋の中は僕が望む家庭環境だった。

テレビは、あんまり大きくはなく部屋の中もあんまり大きくはなく・
・

ああ！！僕はこれを望んでいたんだー！！！！

あまりの嬉しさになきそう・・・僕・・・

「柚木君の部屋はこちらね。」

なんと！僕の部屋まであるのか！豪華すぎる！

「普段は、勉強会に来た子達の寝場所なんだけど・・・柚木君が使うてね。」

「はい！はい！！」

僕は、飛びつくかのように、ドアを開けた。

そこは和室で向こう側には窓。

うつっ・・・神様あ・・・ありがとおございまあーす！

僕が荷物を置こうとしたとき。

床ではなく、硬いなにかに当たった。

なんだ？とそれを見ると・・・

「わぁ！！！！」

女の子が寝ていた・

「うわうわ！！ああ！！！」

もう、驚きのあまりに叫ぶ僕。

その、女の子のまぶたが静かに開き始めた。

「ん……」

女の子が目覚めると、目の前にあった僕の顔をじーと見つめる。

その目はなんかボーとしていて……

髪は、茶髪のショートカット。

3秒ぐらい経ったときかな？女の子が口を開く。

「何で……空は青いのだ？」

「は？」

「だから、何で空は青いのだ？」

「ん……地球だからじゃない？」

「そうかぁ……地球だからか……」

奇想天外な、女の子の質問に戸惑う。

女の子は、はぁーとため息をついた。

「名前はなんというのだ？」

「柚木柚ですけど・・・」

「私は、加賀瀬青葉カガセアヲハというのだ。宜しくなのだ」

「うん・・・宜しく・・・」

加賀瀬さんの微妙な空気に乗せられながら、僕は笑顔で加賀瀬さんと握手を交わす。

その時、暁先生が急に部屋に入ってきた。

息は荒く、どうしたのかなーという感じ、どうしたのかなぁ・・・

「青葉ぁ！まだかえっていなかったの！」

「うん。眠かったのだ。」

こくつと、加賀瀬さんは首を縦に振る。

「もぉ！今日は、居候さんが来るって言ったでしょ？イチ母もみまも帰ったわよ！」

「だつてえ・・・なのだ〜」

頬を膨らませて、ふてくされる加賀瀬さんをほっというて、暁先生は僕に謝る。

「ごめんね！ちょっと、昨日勉強会があつて・・・青葉！もう、帰りなさい！」

「はあい・・・」

加賀瀬さんは、とぼとぼと帰っていった。

何か・・・変な人にあっちゃったなあ・・・

第03話「女顔って好きじゃない」

きつい・・・はつきり言ってきつい・・・

ていうか、なんでこんなことやらなきゃいけないのかなあ！

『自動電力発電』だなんてっ！

もう、汗はだらだら。喉渴いた。だが、僕は自転車をこぎ続ける。

「せんせえ・・・なんで、こんなことお・・・」

暁先生は、チューとオレンジジュースを飲みながら答えた。

「あなたをただで泊めるわけには、いかないでしょ？これから、いろいろやってもらうわ。」

「はあはあ・・・だけでもうがっこ・・・はじま・・・」

僕が、死ぬ気の勢いで人差し指で時計を指す。暁先生は、手に持っていたオレンジジュースを握りつぶすと疾風のごとく

部屋を抜け出した。

せんせえ・・・あなたは、鬼ですう・・・というか・・・僕・・・動けないのですが・・・

「もう・・・だめ・・・」

僕の意識は飛んでいった・・・

*

おかしいなあ・・・先生に預けといたプリントが見つからない・・・
職員室にもないし・・・

一応、宿直室に来てみたけど・・・ないなあ・・・

うゝん、仕方がない。直接先生に聞いて・・・

『がたっ！』

向こうの部屋から、なんか物音が聞こえたよ！どうしたのかなっ！

私が、急いで駆けつけてみると知らない女の子が寝込んでいた。

その横には、テレビで見たことがある『自動電力発電装置』

ああ・・・また暁先生か・・・

もしかして、あれかな？先生が言っていた、居候さん。

へえ・・・男の子って言うてたけど、まるっきり女の子じゃない。

先生のボケも相変わらずよね。

ていうか、なにやらせてるんだ・・・先生は・・・

もう、この子ぐだぐだじゃない・・・

可哀想に・・・先生ってたまに無茶なことやらせるからなあ・・・

とりあえず、手当てしないと。

私は、女の子の側に近づく。

さらさらとした、柚色の髪。汗が、きらきらと輝いて、綺麗だった。

思わず、どきつとしてしまう。

って、私レズじゃない！

それに、この子苦しそうだし！

見惚れている、場合じゃないわよ！

ふーと、ため息を漏らしながら女の子の肌に触れようとした。

その時。

女の子が目を覚ました。

「ん・・・誰・・・ですか？」

女の子は、うつすら目を開けて、私に聞いた。

「石ノ巻黎イシノマキレイていうの。あなたは？」

「っ・・・自分は 柚木柚です。」

はあはあと、息を荒くしながら、柚ちゃんは自己紹介をする。

こんなになるまで、なにやっただ・・・先生・・・

改めて、暁先生の無茶振りの怖さを知った。

「柚ちゃん。私が看病するから、じつとしてね？」

私は、柚ちゃんを膝の上に乗せた。

こくつと、柚ちゃんはうなずいた。

まず、全身の汗を拭こう。タオルで、顔の汗を拭き

首、腕、足 よし、次は胸

胸を拭こうとした時。彼女の胸がないと言つことに気づく。

もしかして・・・男っ！？

えええー！！こんな綺麗な顔してるのに？

ていうか、私・・・ひ、膝枕っ・・・

私の顔は真っ赤になる。

ああ・・・もう柚君より汗が出てきそ・・・

「大丈夫ですか・・・？顔、真っ赤ですよ？」

柚君が、私の顔に手を近づけてくる。

柚君が男と知り、私の体温は急上昇中なのに・・・ッ

そんなことされたら・・・私・・・！

「っ
」

目をぎゅっとつぶり、なるべく柚君の顔を見ないようにする。

だって、柚君がとっても綺麗だったから。

「すみません
」

「へ？なんで、誤るの？」

「だって
」

「黎！もう時間だよー！！」

その時、私の親友が入ってきた。

第04話「幼馴染」

私の、一番の親友は幼稚園からの幼馴染でもあり、世界で一番可愛く、かつこよかったりもする。

そして・・・一番の憧れ。

私が一生成れない、鏡の中の人物。

その人の名前は、石ノ巻黎。彼女とは、幼稚園のときに出会った。

いつも、遠くから彼女を見ていて、その時から彼女のことを『憧れの人』として見ていた。

ある時からだった。彼女が憧れの人＋親友になったのは。

私は、金持ちのせいか、幼いころからほとんど家の中にいて外の世界などあまり見たことはなかった。

ある、好奇心で私は外の世界に行った。

今まで見たことのない場所。そして、大勢の人。

それがあまりにも怖くなってきた。

道の端っこのほうに泣きじやくりながら誰かに助けを求めている。

だれか・・・助けて・・・

が・・・周りの大人たちは私を見て通り過ぎていくばかり。

あらまあかわいそうね・・・迷子かしら？と言いながら通り過ぎていく人もいて。

なら、助けてよぉ！と、幼い私は心の中で叫ぶだけだった。

そんな中、ただただ、泣き続ける私に手を差し伸べてくれたのは、彼女だった。

「どうしたの？」

涙が止まる。最初は、驚いていただけだった。

「迷子？」

泣きすぎたのか言葉が出ない。

「君、同じ幼稚園の三菱遥花ちゃんだよ？分かるかな？石ノ巻黎だよ。」

「う・・・うん」

「あは！泣いてないで、一緒に探検しよー！」

「うん・・・」

最初は、戸惑う私だがだんだんと彼女の優しさに心が溶け始める。

安心感と、嬉しい気持ちが湧いてきた。

その後^こも黎と私は仲良くなり、小学校や中学は違^{ちが}うのにたびたびあったりし・・・

やっと、高校で同じ学校になった。

私は、その人の事が大好きだ。いやいや・・・恋愛ではなくて・・・

友達として。一番の・・・親友だから。

で、そんな親友が生徒会長に選ばれて今日なんか挨拶やらやるのにどこにも見当たらない。

それに先生によれば、特待生君も来ていないらしいし。

しょうがないから私が探してやるかあと、宿直室を見に行ったら・・・

うわーお。新ネタはっけーん！な、なんと、彼女が男子を膝枕しているではありませんか！

こりゃあ、今日に日記に書かなければ損だな。

私が口をゆがめたのか、彼女は真っ赤になって必死で抵抗し始める。

「ち、ちがうの！今、遥花が考えていることは誤解なの！」

今、私が黎に彼氏はっけーん！宿直室で（ピー）中だ！と思
ったのか。

はっはっは・・・全くちがうねー

黎は顔真つ赤になって。可愛いね〜

「ふん……黎の新しい彼氏かあ、どこまでいったの？」

私が少し、からかうともっと赤くして

「ふえ、だからあ！彼氏とかじゃなくてえ！」

黎は、『彼氏』や『キス』とか恋愛に関するワードを聞くと、いつも顔を真っ赤にする。

うん、
純情。ピュア

「もうっ！ 柚君も早くっ！」

$$\begin{matrix} \neg \\ \wedge \\ ? \\ \neg \end{matrix}$$

柚君といわれた男子は床にぐんぐんと頭をぶつける。

私は、柚君に近づき、あることを聞く。

「どうだった？ 黎の膝枕は？」

「はえ？」

柚君はとボケているけど、**黎の顔はヒートアップ**

「遥——！！！！！」

「ごめん、ごめん」

「今日と言つ今日はあー!!」

黎の周りには、ダークオーラが。

まずいな。

「ていうか！始業式始まるわよ！」

私の言葉で、黎は戻る。

「きゃっ！もう、始まるじゃない！」

黎は、時計を見てあわて始める。

「さっさと行くよ！柚君も！」

「あ、はあ」

「はあじゃない！」

柚君と黎は先に行ってしまった。

急がないと。

これからも、見守っているよ、黎。

私も、二人のあとを追った。

第04話「幼馴染」(後書き)

本物の三菱さんではございません。

第05話「クラスメート」

「以上、始業式を終わりにします。」

石ノ巻さんの、挨拶で体育館に拍手が巻き起こる。

僕の周りはざわざわとゆれ始めた。

「やっぱ、生徒会長ってかわいいよなあ〜」

「だよなっ、絶対彼女にしてー」

そんな話が聞きたくもないのに耳に入ってくる。

確かに、石ノ巻さんは美人だ。

少し、茶色がかかっている黒色の髪はさらさらしていて、

髪の右側をヘアピンで止めている。

僕でも分かるべっぴんさんだ。これは小説だから、皆に見せられない事が悲しい。

うん、ホンと。本当だってば！だから、石ノ巻さんはモデル。

僕の隣には、三菱さんがいる。僕がちらつとみると、視線をそらす。嫌われてるのかなあ・・・

ぎりぎり、僕たちは始業式には間に合った。もう、始めますよーと

言うところで。

僕も一応、特待生だから新入生代表の言葉というのをやり・・・

はあ・・・正直疲れましたよ・・・局長。とくたいせーて学費免除だけで、大変なんスね。

*

僕のクラスは、1 - Bだ。教室に入ると、名前の順になっている、席に座っていく。

ちょうど、全員が自分の席に座った時、僕らの担任、暁先生が入ってきた。

「このクラスを担当する、暁理恵です。宜しくお願いします。」

暁先生が皆に自己紹介をする。暁先生は、机に手を置くと

笑顔で言った。

「よしっ！じゃあ、とりあえず自己紹介だっ！」

なぜか、ノリノリな先生だが、周りはマイナスオーラが漂う。

僕は、別にいいんだけど・・・あれかな？言うのが嫌なのかな？

「では、綾鷹君アヤタカからどうぞ！」

イエイと、いわんばかりの笑みをしながら綾鷹君と言われた男の子を指す。

男の子は、無口で立ち上がると口を開いた。

あやたかゆういちろう
「綾鷹祐一郎だ。宜しく」

女子からだろうか、黄色い声が起きる。

綾鷹君って、もてるのだろうか？う、まあ・・・かっこいいもんね・

「はいっ！次いー！」

先生は、もう、ノリノリで順番に指して行く。

生徒たちは、立ち上がり自己紹介をしていく。

5番目ぐらいかな？金髪の髪をした女の子が立ち上がる。

「・・・・・・・・・・」

女の子は無口でその場に立っていた。

自己紹介もしないから、どうしたのかなーと周りはそのこの顔を覗き込む。

すると、女の子はどこからかホワイトボードを取りだし、マジック

ペンでキュツキュツと書いていった。

え？え？僕も周りの人も意味が分からない。

そして、女の子はホワイトボードを持ち上げた。

『おきあみ
置網みま』

窓が開いていないのに、教室には冷たい風が吹いた。

変人だ！たぶん、僕とクラスメートはシンクロしたと思う。

「え、えと次！」

空気を換えようと、先生が次の人を指す。

「加賀瀬青葉っていうのだ。」

加賀瀬さんも同じクラスだったのかあゝ。

次の人は、先生が指名していないのに立ち上がった。

『カザマツリイチ
風祭苺！よろしく〜』

笑顔で風祭さんは自己紹介をした。こういつこって癒されるよね〜

で、どんどん自己紹介は終わり・・・僕の自己紹介が終わったところで、

チャイムが鳴った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8127d/>

柚色物語

2010年10月21日11時16分発行